

ペルージャ滞在・雑記帳

北星学園大学 経済学部 経済法学科 教授 足立 清人

2023年4月から、イタリア・ウンブリア州のペルージャ大学法学部 (Università degli Studi di Perugia, Dipartimento di Giurisprudenza) での在外研究の機会を得た。20数年前に、サッカー選手・中田英寿が活躍したACペルージャ(現ASDペルージャ)の街である—今のペルージャの子どもたちは、中田をあまり知らなかった。受入教員は、ローマ法担当のMarialuisa Navarra教授。大学院時代からの積年のローマ法研究を本格的に再開? するためと、時代・社会の変化から、問題の捉え方について転換が生じつつあるのではないかと考えられるヨーロッパ法学の息吹を感じることを目的とした。大学では、ローマ法担当のCarlo Lorenzi准教授との共同研究室を割り当てられた。土日以外、朝から、大学が閉まる夕方まで、共同研究室が図書館に入り浸っていた—毎日、大学に来る日本人と奇妙に思われていたようである。キャンパスで大学職員に会うたびに、なぜ毎日大学に来るんだ! 人生を楽しめ! と説教? されていた。現在、インターネットを通じて、資料・史料ともに手に入れることができる時代だが、図書館で、書籍・資料・史料などを実際に手に取って、生のテキストを閲覧できることは、新たな発見もあり、この上なく贅沢な時間だった。もっとも、6月以降、天井の天窓から注ぐ陽射しにやられて、図書館に居ながら熱中症になりかけたが…。

出張の醍醐味の一つが、その土地の旨いモノを食べ、酒を飲むことにある、と言われたりするが、自分の場合、それは、その土地を走ることである。訪れた街を走ることで、街の空気・雰囲気、そして人を直に感じることができる。したがって、ペルージャでもほぼ毎日走っていた。日本では、1ヶ月300キロをノルマにしていたが、流石に知らない土地、その半分でも走ろうと決めていた。1、2週間もすると、Google Mapsの助けで、街や郊外の様子も分かってきて、1ヶ月後には、トレーニングの強度に合わせて、10キロ・20キロ・30キロコースが決まった。日常は10キロコース。ほぼ毎日、同じ時間に走っていると、コース途中のパールの店員と(いつも居る)客と顔なじみになり、挨拶と言葉を交わすようになった。1日でも走らないと、体調を崩したのか、とか、日本に帰っちゃったんじゃないか、と心配された…。慣れてくると、自転車・バイクはもちろん、車のドライバーとも、すれ違う際に、手を挙げて挨拶するようになった—日本に戻っても、この習慣を続けているが、怪しい人物と警戒されている(この状況、いかがなものなのだろうか…。) こうした人の温もり? を感じることで、そして、特に郊外を走ることで、土地、建物、そこに住む人の生活の様子を直に見て問題意識や着想を深めること、さらには、街では見られない景観を眺めることが、毎日の楽しみだった。しかし、ペルージャは、山の上に位置する街。毎日がトレイル・ランニングとなり、加えてイタリアの酷暑で、体重が10キロ以上落ちたのは想定外だった。ペルージャ大学を去る日、先生方と大学職員とのお別れの場で、どこで見られていたのか、複数の先生や職員から、いつも走ってただろう! と指摘を受けて恥じ入ったのも、良い思い出である。

最後に、国際書房との取引は、大学院時代から数えて30年を超える。かつては毎月? 送られてきたカタログを見るのが楽しみだった(今でもそうである)。書籍から、今、諸外国では、何がトピックなのかを垣間見ることができるからである。北海道地区担当の長谷昌也さんとの交流について記さなければならない。長谷さんとの出会いは、10数年前の前任校赴任時。当時は、旭川にも数ヶ月に一度、足を運んでくれていた。書籍の注文、重複買いの確認など、研究活動の進展で助けられただけでなく、ときには、趣味の音楽—プログレッシブ・ロックやハード・ロックなどにも話しかおよんで(長谷さんは、イエス派?、僕は、エイジア派? だった)、交流を深めることができた。イタリアからの帰国後も、カタログに載っていないイタリア書の注文などで、長谷さんにお世話になっている。ウェブサイトでワンドリックで書籍の注文は可能だが、自分にとっては、長谷さんを介しての書籍の購入に付加価値を感じている。

性格的にも能力的にも、学問的なエッセイを書くことはできない。格調の高い一連のエッセイに、脈絡のない駄文を加えたことをお詫びしたい。